

# 新・瘠我慢の説

経済学者  
渡辺利夫

## 第二十二回 思想と人生——後藤新平のこと

後藤新平についても少し語っておこう。後藤は内務省衛生局長に就任以来、台湾総督府民政長官、満鉄総裁を経ていくつもの閣僚を含む要職に次ぐ要職を務めてきた。それぞれにあつて変幻自在な政策の建議・立案・施行を指揮した稀有の官僚政治家である。多彩な政治的経歴を後藤ほどダイナミックに展開した人物は、日本の近代史なかでもそうはいない。後藤の縦横無尽の人生には一個の信条が貫いていた。揺らぐことのない信条があればこそその自在な人生であった。

後藤の信条は衛生局勤務時代、明治二十二年

(一八八九)、三十二歳の時に著した『あらわ国家衛生原理』(国会図書館デジタルコレクション)のなかに顕現される。この著作の執筆を通じてみずからの思想が言語化されて思想となり信条となり、これが後藤の人生を方向づけた。後藤は政治家にしては多作の人だが、この著作ほど自身の間観、国家観、世界観を力道的に説いたものは他にない。

著作のベースとなったのはソーシャル・ダーウィニズムと称され、一世を風靡した社会進化論である。チャールズ・ダーウィンの『種の起源』によって説き明かされた生存競争、適者生存を基礎概念と

する生物学的進化論が、生物学の域を超えて社会思想にまで深甚しんじんな影響を与えたのである。

生命体としての個体が次世代に継承されていくためには、みずからを取り巻く環境にうまく適応しようとする個体相互の間で競争が生まれ、この生存競争の過程で環境に適応できた個体が生き延び、適応できなかった個体は自然淘汰され、かくして生命体は進化をつづけるとダーウィンは説いた。この生物学的進化論を社会進化論として提起したのがハーバート・スペンサーである。適者生存というのはスペンサーの造語である。

社会が進歩するという思想はスペンサー以前にあつては希薄であつた。しかし、当時の欧米諸国を巻き込んだ技術革新と産業革命の波は社会に大きな変動をもたらし、この社会変動には何か説明さるべき固有の方向性があるのではないかと考えられてスペンサーにいたつた。後藤を深く捉えとらえたのもスペンサー流の社会進化論であつた。後藤はこ

う。「生存競争の道は瞬時たりとも途絶えることはない。適者生存の道理から離れることもできない。それゆえ、いやしくも生を授けられた者は競争の攻撃に抵抗し、これを克服し、みずからを養い、生殖をつづけなければ生をまっとうすることはできない。人間だけはそうではない、というわけにはいかない。人間も生物の一つだからである」

「人類も亦また実に生物の一なり」。こう見定めたことが後藤の出発点であり、到達点でもあつた。この文章につづいて後藤は、人間が生きていくことの目的についてこう述べる。

「生体を傷つけるものに抵抗し、これを克服し、公正を保ちながら給養と生殖を営み、心と体を健全に発達させるのに十分な生活状態、すなわち『生理的円満』を確保することこそが人間の生の目的に他ならない」

人間も生物の一つであるがゆえに、さまざま外装をすべて取り払って最終的になお残る人間生存の究極的な目的は、生理的円満の確保にある。そ

して人間がこの生理的円満を求めるのは、人間のなかに本来的に埋め込まれている「生理的動機」のゆえであり、これは人間に「固有セル一種ノ天性」だともいう。生理的動機にもとづいて生理的円満を求め、これを手にすることが人生の最終的な目的である。正邪とか善悪とかいう倫理は、この最終的目的を獲得するための「仮称」に過ぎない。後藤はこういう。

「社会のことがらについて正邪だとか正不正だといふのは、実は健全なる生活を営むのにそれが適正であるのか否か、つまりは生理的円満に資するのにか否かだということに他ならない」

価値の徹底的な相対化である。

後藤の唱える「衛生」の概念は通例のものよりは広い。人間の生存を保障する社会的機能、法や制度や組織、医療、上下水道を含むインフラ全体を指す。人間の生理的円満を満たすための法や制度、組織のことごとくが衛生にかかわり、国家とは実は衛生を保障するための「衛生団体」だといふ

のである。どうしてそうなるのか。人間の生理的円満は個々の人間の力では到底確保できない。個々の人間の力を超えた「公共ノ力」が欠かせない。各々が生理的円満を放縦に追求してもこれを手にすることはできない。個々の人間の生理的円満を満たすには公共的秩序が不可欠である。公共的秩序の形成者がつまりは国家なのだ。後藤はいう。人間に内在する生理的円満への欲求が国家の存在を必然的に求める、そういう思考の回路が後藤のものであった。後藤の国家起源説である。

個々人の私的利益の追求が自己運動を重ねていつて最適解にいたるといった予定調和的な世界観とはきわだつて対照的な世界観が後藤のものであった。この世界観を現実のものにしようという試図が後藤の台湾開発であった。後藤は台湾住民が生理的円満を得ようとどのような慣行のなかで生きてきたのか、まずはこのことを徹底調査することから始めねばならないと考えた。児玉源太郎から総督就任に際しての施政方針演説のための草稿を認

めよと命じられた際、後藤があの子玉に対していまは施政方針を表明する時期ではありません、と述べたという。総督がまずやるべきことは、総督がその統治を委任された台湾の住民生活のありよう、台湾社会のグラスルーツに古くから伝わる慣行、つまりは「旧慣」を調査することであり、そのうえで「生物学の原理」にもとづく統治を開始しようではないかと諄々説いたのである。

個々の生物はそれぞれ固有の生態的条件のなかで生きている。一国の生物を他国に移植してもうまくはいかない。個人や集団のなかに古くから伝わる固有の習慣、制度を無視して権力を一方的に行使してはならない。そうではなくて、権力が行使される「場」の習慣、制度を十分に尊重し、これとできるだけ齟齬をきたさないような政策が必要だと考えたところに、後藤の思想の練磨があった。

後藤の広く知られている語りに、「鯛の目と比目魚の目」がある。ここでは「社会の習慣とか制度というものは、みな相当の理由があつて長い間の必要

から生まれてきているものだ。その理由も弁えずに未開国に文明国の文化と制度を実施しようとするのは文明の逆政というものだ」という。

後藤は第四代総督の児玉源太郎という権威において比類なき軍政家に任せ、その厚い信頼を得た。しかも帝国憲法や帝国議会の制約からも離れてフロンティア台湾の白いキャンパスのうえに年来の思想「生物学の原理」にもとづくアヘン漸禁策、土匪招降策、旧慣調査、土地制度改革、衛生事業、インフラ整備事業などを次々と展開していった。台湾近代化の基盤形成は後藤の思想と政策によって幕が切つて落とされたのである。言及する暇がなかったが、諸事業のための人材抜擢、抜擢された人間への全幅の信頼、信頼に応える技術者、官僚の後藤への献身が台湾統治成功の物語を彩っている。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、校長を歴任。八五年、成長のアジア 停滯のアジアで吉野作造賞受賞。八七年、開発経済学で大平正芳記念賞受賞。九〇年、西太平洋の時代でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、「神経症の時代」で開高健賞正賞受賞。二〇一一年、正論大賞。